「小倉百人一首」現代語訳

『小倉百人一首』は、平安時代の歌人である藤原定家（ふじわらのさだいえ）が、古代から平安時代を経て鎌倉（かまくら）時代初期（七～十三世紀）までの優（すぐ）れた歌人百人を選び、それぞれ和歌一首を掲（かか）げ、おおよそ年代順にまとめたものです。声に出して読んだり、暗記したり、さらには歌の中の情景や心情を読み解いて味わったりしましょう。

1　秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ

作者　**天智天皇**［六二六―六七一］第三十八代の天皇。皇太子時代は中大兄皇子といい、藤原鎌足とともに蘇我氏を討ち、大化の改新を行った。

歌意　秋の田の、刈り取った稲穂の番をする仮小屋にいると、苫ぶきの屋根が粗末で編みめが粗いので、（つらくてぬぐう涙でただでさえ袖がぬれているのに）私の着物の袖はしたたり落ちる夜露にしきりにぬれ続けているよ。

2　春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山

作者　**持統天皇**［六四五―七〇二］天智天皇の第二皇女で、天武天皇の皇后となったのち、第四十一代天皇に即位した。藤原の宮に遷都し、万葉歌風の最盛期を作り上げた。

歌意　春が過ぎて、いつのまにか夏がやってきてしまったらしい。（夏になると）白い衣を干すといわれる天の香具山に、（緑の山裾には）あのように夏に着る白い衣が干してあることよ。

3　あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を独りかも寝む

作者　**柿本人麻呂**［生没年不詳］人麿、人丸とも。万葉第二期の宮廷歌人。三十六歌仙の一人。荘重雄大で、格調高い歌を詠んだ。万葉時代最大の歌人であるとともに、和歌史上最大の歌人であるともいわれる。

歌意　山鳥の長く垂れ下がった尾のように長い長い夜を、（山鳥の雄が雌から離れて一羽で寝るようにあなたから離れて）私もまたひとり寂しく寝るのであろうか。

4　田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ

作者　**山部赤人**［生没年不詳］万葉第三期の宮廷歌人。柿本人麻呂とともに歌聖と称された。東国・四国などを旅し、優れた叙景歌を詠んだ。三十六歌仙の一人。

歌意　田子の浦（の眺望の開けたところ）に出て見渡すと、真っ白い富士の高い嶺には、しきりに雪が降っていることだよ。

5　奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の声聞く時ぞ秋は悲しき

作者　**猿丸大夫**［生没年不詳］三十六歌仙の一人とされるが、実在したのかも疑われるほど詳細がわかっていない。

歌意　人里離れた深い山に、散り敷いた紅葉を踏み分けて鳴く鹿の声を聞くときは、とりわけ秋は悲しい季節だと感じられることだ。

6　かささぎの渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける

作者　**中納言家持**［七一八―七八五］大伴家持のこと。万葉第四期の代表的な歌人。三十六歌仙の一人。政治的には余り恵まれなかったが、『万葉集』編纂では中心的な人物であったと考えられている。繊細優美な歌風。

歌意　かささぎが架け渡したという天の川の橋にたとえられる宮中の御階に降りている霜が白くなっているのを見ると、すっかり夜も更けてしまったことだなあ。

7　天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

作者　**安倍仲麿**［七〇一？―七七〇］遣唐留学生として唐に渡り、玄宗皇帝に重用された。帰国の際に暴風雨に遭い、安南（ベトナム）に漂着し、その後も唐朝に仕えた。詩人の李白や王維とも親交があった。

歌意　広々とした大空を振り仰ぎはるか遠くを眺めると、月が美しく昇っているが、あの月は以前、春日にある三笠の山にさし昇った懐かしい月と同じなのだなあ。

8　我が庵は都の辰巳しかぞ住む世をうぢ山と人はいふなり

作者　**喜撰法師**［生没年不詳］嵯峨天皇の弘仁年間（八一〇―八二三）に活躍したとされる。『古今集』の仮名序では六歌仙の一人として評が出ているが、生没年などはいっさい不明。

歌意　私の庵は都の東南にあり、鹿のすむような辺鄙な所ではあるが、このように心安らかにのんびりと住んでいる。それなのに世間の人は、世の中を住みづらく思って逃れ住んでいる宇治山などと言っているそうだ。

9　花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせし間に

作者　**小野小町**［生没年不詳］仁明（八三三―八五〇）・文徳・清和天皇（八五八―八七六）の頃の女性歌人。六歌仙および三十六歌仙の一人。絶世の美女であったとされるが晩年は落ちぶれて諸国を流浪したとも。

歌意　桜の花の色はすっかり色あせてしまったことだなあ。そして私の容色もすっかり衰えてしまったことだなあ。世の雑事や恋に紛れたりしてむなしく暮らし、降り続くこの長雨に降りこめられて、雨をぼんやりと眺め、もの思いにふけっているうちに。

10　これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関

作者　**蝉丸**［生没年不詳］『後撰集』などに記載があるものの、詳細は不明。九世紀後半頃の人物であったと思われる。

歌意　これがまあ、この、京都から東国へ下る人も、東国から都に帰る人も、お互いに知っている人も、知らない人も、会っては別れ、別れてはまた会うという、その名の通りの逢坂の関であることだなあ。

11　わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海人の釣り舟

作者　**参議篁**［八〇二―八五二］小野篁のこと。特に漢詩文で才能を発揮し、流罪となった際にもその才能を惜しまれ、後に帰京した。同時代の和歌の名手在原業平に対し、漢詩の小野篁と称えられた。

歌意　（流罪となって隠岐に流される私は瀬戸内海の）広々とした海原のたくさんの島々を目指して、漕ぎ出していったと、（都にいる）人に伝えておくれ、釣り舟の漁師たちよ。

12　天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよをとめの姿しばしとどめむ

作者　**僧正遍昭**［八一六―八九〇］俗名は良岑宗貞。仁明天皇の寵を得て、蔵人頭、さらには左近衛少将になったが、天皇の崩御に伴って出家した。六歌仙・三十六歌仙の一人。

歌意　空吹く風よ。雲の切れ間にある天と地上とを結ぶ道を吹いて閉ざしておくれ。五節の舞を舞い終わった天女のように美しい舞姫たちの姿をもうしばらくの間この地上にとどめておこう。

13　筑波嶺の峰より落つる男女川恋ぞつもりて淵となりぬる

作者　**陽成院**［八六八―九四九］清和天皇の第一皇子。八歳で第五十七代天皇に即位したが、勧められて十七歳のときに光孝天皇に譲位した。

歌意　筑波嶺の峰から流れ落ちる男女川（は、最初は僅かな水量だが、だんだんと水かさが増していき、深い淵となってしまうものである、）と同じように、あなたに対する私の恋心はだんだんと積もり積もって、こんなに深いものになってしまいました。

14　陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに

作者　**河原左大臣**［八二二―八九五］源融のこと。嵯峨天皇を父にもつが、元服後、源氏の姓を受けて臣籍に下った。河原院や東六条院などの豪邸を持っていたことから、河原院、河原左大臣などと呼ばれた。

歌意　陸奥のしのぶもじずりのように私の心は乱れていますが、誰のために乱れ始めたのでしょうか。あなた以外の誰にも心を乱そうとするような私ではないのに。そう、他ならぬあなたのためなのです。

15　君がため春の野に出でて若菜摘む我が衣手に雪は降りつつ

作者　**光孝天皇**［八三〇―八八七］仁明天皇の第三皇子で、五十五歳で即位し第五十八代天皇となったが、三年余りで崩御。特に和歌を好み、漢詩文から和歌の時代へのきっかけを作った。

歌意　いとしいあなたのために春の野に出て若菜を摘む私の袖には、雪がしきりに降り続いていることよ。

16　立ち別れいなばの山の峰に生ふるまつとしきかば今帰り来む

作者　**中納言行平**［八一八―八九三］在原行平のこと。在原業平の異母兄にあたる。政治的手腕に優れ、風流も好んだ。

歌意　今あなたと別れて因幡の国に行ったとしても、そこの稲葉山の峰に生えているという松ではないが、あなたが私のことを待っていると聞いたならば、今すぐにでも帰ってこよう。

17　ちはやぶる神代も聞かず龍田川唐紅に水くくるとは

作者　**在原業平朝臣**［八二五―八八〇］『伊勢物語』の主人公であるとされる。みやびやかで感情豊かな和歌を詠み、六歌仙の一人に数えられる。

歌意　不思議なことが数多くあったという神代にだって聞いたことがない。龍田川が、（川面に散り敷いた紅葉によって）流れる水を色鮮やかな紅色に絞り染めにするとは。

18　住の江の岸に寄る波よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ

作者　**藤原敏行朝臣**［？―九〇一？］藤原不比等のひ孫にあたり、宇多天皇に仕えた。三十六歌仙の一人。鋭い感覚の歌を詠み、能書家としても知られる。

歌意　住の江の岸に打ち寄せる波の、そのよるという言葉ではないが、人目のある昼はしかたがないとしても、どうして夜までも、あなたは夢の中の恋しい人のところへ行き通う道で人目を避けているのであろうか。

19　難波潟短き芦の節の間も逢はでこの世を過ぐしてよとや

作者　**伊勢**［八七七頃―九三八頃］宇多天皇の中宮温子に仕えた。『古今集』撰者時代の代表的な女性歌人。優れた技巧の中にも哀愁を漂わせた歌を詠んだ。三十六歌仙の一人。

歌意　難波潟。そこに生えているあの芦の短い節と節の間のように、ほんの僅かな間でもあなたに会わないでこの世（＝二人の仲）を過ごしてしまえとおっしゃるのですか。

20　わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ

作者　**元良親王**［八九〇―九四三］陽成天皇の第一皇子。当時随一の風流人として有名で、複数の恋の逸話が『大和物語』にもみられる。

歌意　（あなたとのことが人に知れてうわさとなり、お会いすることができなくなって、）恋しい思いに苦しんでいますので、今となってはもう身を滅ぼしたのも同じことです。それならいっそのこと、難波潟にある澪標という名のように、この身を滅ぼしてもよいからあなたにお会いしようと思います。

21　今来むといひしばかりに長月の有り明けの月を待ち出でつるかな

作者　**素性法師**［生没年不詳］僧正遍昭の子。十世紀初頭に活躍したと考えられる。三十六歌仙の一人で、書家としても知られる。

歌意　今すぐ行きましょう、とあなたが言ったばかりに、（私はそれを信じてあなたの訪れを今か今かと待っているうちに夜が明けてしまい、待ってもいない）九月の有り明けの空に残る月と会ってしまうことになったことであるよ。

22　吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらむ

作者　**文屋康秀**［生没年不詳］平安初期の歌人。八九三年または八九六年頃までは生存していたと思われる。小野小町と親交があったとされる。六歌仙・三十六歌仙の一人。

歌意　吹きおろすとたちまちに秋の草木がたわみうなだれてしまうので、なるほどそれで、山から吹きおろす風のことを荒々しい嵐というのであろうか。

23　月見ればちぢに物こそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど

作者　**大江千里**［生没年不詳］九〇〇年前後の人と思われる。漢学に優れ、儒学者としても知られる。和歌も、漢詩の詩句を翻案したものが多い。

歌意　月を見るといつも、さまざまに、物皆全てが悲しくなることだ。秋は私一人のところにやってきて悲しい思いをさせるというわけではないのだけれども。

24　このたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに

作者　**菅家**［八四五―九〇三］菅原道真の尊称。菅公ともいう。詩文に優れ、政治家としても有能であった。宇多天皇、醍醐天皇に重用されたため、讒言にあい、大宰権帥に左遷された。当代随一の漢学者でもあった。

歌意　今度の旅は（宇多上皇のお供という）慌ただしい旅のため、道祖神にささげる幣も用意できませんでした。そこでとりあえず、この手向山の錦織のように美しい紅葉をお供えいたしますから、（どうか）神の御心のままにお受けください。

25　名にし負はば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな

作者　**三条右大臣**［八七三―九三二］藤原定方のこと。和歌・管弦に優れていた。『大和物語』の複数の章段に登場する。ひ孫の宣孝は、紫式部の夫である。

歌意　逢坂山という、逢うという名前をもっているならば、そしてまた、さねかずらという、共寝をするという名前をもっているならば、逢坂山のさねかずらよ。蔓を繰るように、人に気づかれないで恋しい人のもとへ行って共寝する手だてが欲しいものだなあ。

26　小倉山峰のもみぢ葉心あらば今一度の行幸待たなむ

作者　**貞信公**［八八〇―九四九］藤原忠平のこと。聡明かつ温厚な性格で、政治においては一生涯要職にあった。藤原氏の長となってからは、摂政、太政大臣、関白になった。

歌意　小倉山の峰の紅葉よ。もしおまえに物の趣を理解する心があるのならば、もう一度の行幸があるまで、散らずに待っていてほしい。

27　みかの原わきて流るるいづみ川いつ見きとてか恋しかるらむ

作者　**中納言兼輔**［八七七―九三三］藤原兼輔のこと。耽美的な歌風で、三十六歌仙の一人。紀貫之などとも親交があった。『大和物語』にも逸話が見られる。

歌意　みかの原を分け、湧き出て流れる泉川の泉ではないが、いつ会ったということで、私はあの人のことをこんなに恋しく思われるのだろうか。一度も会ったことなどないのに。

28　山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば

作者　**源宗于朝臣**［？―九三九］光孝天皇の孫で、源姓を賜って臣籍に下ったが、なかなか昇進しなかった。紀貫之と歌の贈答をしたこともある。三十六歌仙の一人。

歌意　山里は（町中に比べると）元来寂しいものではあるが、冬にはいっそうその寂しさがまさることだなあ。人の行き来も途絶えてしまい、草も枯れてしまうと思うといつでも。

29　心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花

作者　**凡河内躬恒**［生没年不詳］紀貫之とも親交があり、『古今集』撰者の一人となった。三十六歌仙の一人。比較的素直な歌風で、叙景歌に優れる。歌人としては活躍したが、政治の面では昇進できなかった。

歌意　もしも折るならば当て推量で折ろうか。初霜が一面に降りて真っ白になってしまい、どこに花があるのかわからなくなってしまっている白菊の花を。

30　有り明けのつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし

作者　**壬生忠岑**［生没年不詳］『古今集』撰者の一人で、その時代の代表的歌人。柔和な歌風で、歌人として早くから有名であった。三十六歌仙の一人。

歌意　有り明けの月が無情にも空に残っているように、あの人の態度がいかにも冷たく見えた別れ以来、暁ほどつらいものはありません。

31　朝ぼらけ有り明けの月と見るまでに吉野の里に降れる白雪

作者　**坂上是則**［生没年不詳］理知的な歌風で、『古今集』時代の代表的な歌人の一人として、紀貫之と並び称される。三十六歌仙の一人。蹴鞠の名手としても知られる。

歌意　夜がほんのり明けて物がほのかに見える頃、明け方の月の光かと思われるほどに、吉野の里に降り積もっている白雪であることよ。

32　山川に風のかけたる柵は流れもあへぬ紅葉なりけり

作者　**春道列樹**［？―九二〇］九二〇年に壱岐守（＝現在の長崎県の長官）に任ぜられたが、赴任前に没した。歌人としては目立った業績はない。

歌意　山間の谷川に（人ではなく）風が架け渡した柵があるが、（それはよく見ると）流れようとしても流れることのできない（で散りたまった）紅葉であったのだなあ。

33　ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

作者　**紀友則**［生没年不詳］紀貫之のいとこにあたり、優美で格調のある歌風で知られる。『古今集』の撰集に従事したが、完成を待たずして九〇七年頃に没したとされる。

歌意　日の光がのどかな春の日に、どうして落ち着いた心もなく桜の花は慌ただしく散っているのだろうか。

34　誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに

作者　**藤原興風**［生没年不詳］九世紀末から十世紀にかけて活躍したものと思われる。三十六歌仙の一人。管弦にも優れ、弾琴の師になったといわれる。

歌意　（年老いた私はいったい）誰を友としようか。（昔からの友人は皆亡くなってしまい、残っているのは年老いた高砂の松ぐらいだが、その）高砂の松でさえ昔からの友人ということではないのだが。

35　人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける

作者　**紀貫之**［？―九四五？］漢学と和歌に優れる。初めての勅撰集である『古今集』二十巻を凡河内躬恒らとともに完成させ、その序文である「仮名序」も書いた。『土佐日記』の作者でもある。三十六歌仙の一人。

歌意　（人の心は変わりやすいものだから）ここに住んでいるあなたは、さあ、（昔のままであるかどうか、その）心はわからない。（あなたの心は変わったかもしれないが）昔なじみのこの里では、梅の花だけが昔と変わらない香りで、美しく咲きほこっていることだなあ。

36　夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ

作者　**清原深養父**［生没年不詳］清少納言の曾祖父にあたる。九〇〇年頃に活躍したと思われる。やや観念的な歌風であった。琴に優れていた。

歌意　夏の夜は、まだ宵のうちと思っている間に明けてしまったが、（これでは月も西に沈むことができまい）雲のいったいどのあたりに月は宿っているのであろうか。

37

白露に風の吹きしく秋の野は貫き止めぬ玉ぞ散りける

作者 **文屋朝康**［生没年不詳］九世紀末から十世紀初頭に活躍した歌人。文屋康秀の子といわれるが、詳細は不明。

歌意 草木の葉に置いた白露に風がしきりに吹きつける秋の野は、（露が吹き散って）まるで、糸を通して止めていない真珠が散っているかのようだなあ。

38

忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな

作者 **右近**［生没年不詳］平安中期の女性。醍醐天皇の皇后穏子に仕えた。同じく女性歌人である伊勢と並び称された。

歌意 あなたに忘れられる私の身のことはつらいとも思いません。（しかし、いつまでも）私を愛すると神に誓ったあなたの命が（誓いを破ったための神罰によって縮められたりはしないかと）惜しく思われることですよ。

39

浅茅生の小野の篠原忍ぶれどあまりてなどか人の恋しき

作者 **参議等**［八八〇―九五一］源等のこと。嵯峨天皇の皇子広幡大納言弘の孫。平安中期の歌人であるが、歌人としての目立った実績はない。

歌意 丈の低い茅の生えた野の篠原ではないが、その「しの」という言葉のように、私は（恋しい思いを）こらえているけれども、こらえきれないで、どうしてあなたがこれほどまでに恋しく思えるのだろうか。

40

忍ぶれど色に出でにけり我が恋は物や思ふと人の問ふまで

作者 **平兼盛**［？―九九〇］光孝天皇の皇子是貞親王のひ孫にあたる。三十六歌仙の一人。家集に『兼盛集』がある。

歌意 （人に知られまいとじっと）こらえてはいたが、（とうとう）顔に表れてしまいましたよ、私の恋は。恋のもの思いをしているのかと人が尋ねるまでに。

41　恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひ初めしか

作者　**壬生忠見**［生没年不詳］壬生忠岑の子で、十世紀中頃に活躍した歌人である。官位には恵まれなかったが、歌人としては優れていた。三十六歌仙の一人。

歌意　恋をしているという私の評判が早くもたってしまったなあ。人に知られないように（ひそかに）あの人を恋し始めたのに。

42　契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは

作者　**清原元輔**［九〇八―九九〇］清原深養父の孫で、清少納言の父。『万葉集』の訓点の仕事と、『後撰集』撰集の仕事に従事した。三十六歌仙の一人で、家集に『元輔集』がある。

歌意　（二人で確かに）約束しましたよね。お互いに涙にぬれた袖を絞りながら、末の松山を波が越すことがないように、（私たち二人も）決して心変わりしますまいとね。（それなのにどうしてあなたは心変わりしてしまったのですか。）

43　逢ひ見ての後の心に比ぶれば昔は物を思はざりけり

作者　**権中納言敦忠**［九〇六―九四三］藤原敦忠のこと。左大臣藤原時平の三男。三十六歌仙の一人で『大鏡』には「よにめでたき和歌の上手」といわれ、また、音楽にも優れ、琵琶を得意として「枇杷中納言」とも呼ばれた。

歌意　あなたと会って契りを結んだあとの今の深い恋心に比べると、契りを結ぶ前の恋のつらさなど、もの思いの数にも入らないものだったなあ。

44　逢ふことの絶えてしなくはなかなかに人をも身をも恨みざらまし

作者　**中納言朝忠**［九一〇―九六六］藤原朝忠のこと。三条右大臣藤原定方の五男。三十六歌仙の一人。和漢の学に優れ、音楽では笙（笛の一種）の名手であった。家集に『朝忠集』がある。

歌意　あなたと会って契りを結ぶということがもし全くなかったならば、かえって、あなたをもそしてわが身をも恨みなどはしないだろうに。

45　あはれともいふべき人は思ほえで身のいたづらになりぬべきかな

作者　**謙徳公**［九二四―九七二］藤原伊尹のこと。九条右大臣師輔の子、兼家の兄、義孝の父にあたる。謙徳公は諡。藤原家の嫡流ではあったが、なかなか昇進しなかった。しかし、娘の懐子が冷泉天皇の親王（後の花山天皇）を生み、一躍出世した。

歌意　（あなたに見捨てられたこの私を）ああ、かわいそうにと言ってくれるはずの人も思い浮かんでこなくて、私はこのまま死んでしまうにちがいないことだなあ。

46　由良の門を渡る舟人かぢを絶えゆくへも知らぬ恋の道かな

作者　**曾禰好忠**［生没年不詳］官位が低く、性格的にも偏屈であったために、寛和元年の円融院の子の日の御幸にお召しもなく参上して追い出された話が『今昔物語集』巻二十八などに出ている。百首歌（題ごとに五首・十首と歌を作り、合計百首になるようにする）を始めたとされる。

歌意　（流れの速い）由良の海峡を渡る舟人が櫓や櫂を失って行方もわからず漂っているように、これから先どうなるかわからない（私の）恋の将来であることよ。

47　八重葎茂れる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり

作者　**恵慶法師**［生没年不詳］花山天皇の頃に活躍したと思われる。『拾遺集』時代の代表的な歌人であった。平兼盛・源重之・大中臣能宣らと親交があり、河原院に集まる歌人たちの中心となった。

歌意　幾重にも雑草の生い茂っている住まいで寂しい所に、訪れる人の姿は見えないが、（いつもどおり）秋だけはやってきたことだなあ。

48　風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけて物を思ふころかな

作者　**源重之**［生没年不詳］百首歌を始めたとする説もある。恵慶法師などとも親交があった。三十六歌仙の一人。

歌意　風が激しいので、岩を打つ波が自分だけ砕けるように、（恋する人は岩のように冷たいので）私一人だけが心もくだけんばかりに恋のもの思いに悩む今日この頃であるよ。

49　みかき守衛士のたく火の夜は燃え昼は消えつつ物をこそ思へ

作者　**大中臣能宣朝臣**［九二一―九九一］代々祭主となる神官の家柄であった。梨壺の五人に選ばれて和歌所の寄人となり、『万葉集』の訓点と『後撰集』の撰集を行った。三十六歌仙の一人。

歌意　宮中の御門を守る衛士のたくかがり火の（夜は燃え、昼は消えている）ように、（私の恋の炎も）夜は燃え上がり、昼は消え入るような状態が続き、恋のもの思いに悩んでいることよ。

50　君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな

作者　**藤原義孝**［九五四―九七四］十二歳のときに一条院の御前で連歌を詠んで人々を驚かせたという。疱瘡（天然痘）のために二十一歳の若さで没した。

歌意　あなたに会うためなら、（たとえどうなっても）惜しくはないと思っていた（私の）命までも、（あなたに会った今は）長くあってほしいと思（うようにな）ったことであるよ。

51　かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを

作者　**藤原実方朝臣**［?―九九八］藤原隆家・公任らと交遊があった。清少納言とは恋愛関係にあったという。自由奔放な歌風で知られる。

歌意　このようにあなたを恋い慕っているとさえ言うことができないのだから、ましてや、伊吹山のさしも草ではないが、それほどまでとは知らないでしょうね、（あなたへの）燃えるような私の思いを。

52　明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな

作者　**藤原道信朝臣**［九七二―九九四］藤原公任や実方らと親交があり、「いみじき和歌の上手」と称されたが、二十三歳という若さで没した。その早逝が多くの人に惜しまれたことが『大鏡』や『今昔物語集』などに見える。

歌意　夜が明けてしまうと、また日が暮れてあなたに会えるものとはわかっているものの、やはり恨めしい思いのする夜明けであることよ。

53　嘆きつつ独り寝る夜の明くる間はいかに久しきものとかは知る

作者　**右大将道綱母**［九三七？―九九五？］藤原道綱母のこと。『蜻蛉日記』の作者。和歌・音楽にも優れていた。『枕草子』（清少納言）や『大鏡』でも、その歌の才能が称えられている。

歌意　（あなたの訪れがなくて）嘆きながら一人で寝る夜が明けるまでの間は、どれほど長いものであるか、あなたはご存じでしょうか、いやご存じではないでしょう。

54　忘れじの行く末までは難ければ今日を限りの命ともがな

作者　**儀同三司母**［？―九九六］本名は貴子。中関白藤原道隆の妻となり、儀同三司伊周、隆家、一条天皇の中宮定子を産んだ。漢学、音楽に優れ、当時の代表的な知識人であったが、道隆の死に伴って出家した。

歌意　（私のことを）忘れるまいとおっしゃるあなたの言葉が将来までも変わらないということは難しいので、（お会いしてその言葉を聞いた）今日を最後とする命であってほしいものだ。

55　滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ

作者　**大納言公任**［九六六―一〇四一］藤原公任のこと。博学多才で、和歌・漢詩・管弦に優れ、「三船（三舟）の才」といわれた。特に和歌では、紀貫之・藤原定家とともに、中古の三歌人と称された。『和漢朗詠集』の編集などにも携わった。

歌意　（昔、嵯峨天皇が造ってめでた滝殿の）滝の音は途絶えてから長い年月がたってしまったけれども、その高い評判は世に流れ伝わって、今でも耳に入ってくることだなあ。

56　あらざらむこの世の外の思ひ出に今一度の逢ふこともがな

作者　**和泉式部**［生没年不詳］一〇〇〇年前後に活躍した。『和泉式部日記』の作者。小式部内侍の母。歌の才能のほか、多くの恋の逸話が残されている。

歌意　（病で死にそうになっている私は）生きてはいないかもしれない。あの世への思い出のために、もう一度、あなたとお会いしたいものです。

57　めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に雲隠れにし夜半の月かな

作者　**紫式部**［生没年不詳］九七〇年頃に生まれ、一〇一四年に没したともいわれる。一条天皇の中宮彰子に仕えた。深い教養と鋭い観察眼、審美眼で『源氏物語』や『紫式部日記』を残し、歌人としても優れた才能を発揮した。

歌意　（久しぶりに）めぐり会ったのは、その人かどうかもわからないうちに、雲に隠れてしまった夜中の月のように、すぐにお帰りになってしまった幼友達であることだ。

58　有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする

作者　**大弐三位**［生没年不詳］九九九年に生まれ、一〇七七年頃に没したといわれる。父は藤原宣孝、母は紫式部である。後冷泉帝の乳母になったので、弁局などとも呼ばれた。内裏や宮家の歌合にも参加したといわれる。

歌意　（あなたは私があなたを忘れるのではないかと不安がるけれども）有馬山から猪名の笹原に風が吹くと、笹の音がそよそよと鳴る、そう、そうですよ（不安なのはあなたのほうの心変わりですよ）、私があなたのことを忘れるでしょうか、いや忘れはしません。

59　やすらはで寝なましものをさ夜更けて傾くまでの月を見しかな

作者　**赤染衛門**［生没年不詳］九五八年頃に生まれ、一〇四一年頃まで生きていたとされる。藤原道長の妻倫子、上東門院彰子に仕えた。後宮文学サロンの中心的な人物の一人で、和泉式部とともに、平安時代の代表的な歌人であった。

歌意　（あなたが私にあてにさせなければ）私はためらうことなく寝てしまったでしょうに、（来てくださるというお言葉を頼みにして、もうおいでになるのではとお待ちしているうちに）夜が更けて、西に沈むまで月を見てしまったことですよ。

60　大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

作者　**小式部内侍**［？―一〇二五］母は和泉式部、父は橘道貞。中宮彰子に仕え、母の式部に対して小式部といわれた。二十五歳前後で病没。三才女（紀内侍・小式部内侍・伊勢大輔）の一人として知られる。

歌意　大江山を越え、生野を通って丹後へと行く道が遠いので、まだ行ってみたこともありません、天の橋立は。そして、まだ（丹後にいる母からの）手紙も見ていませんよ。（ですから私の歌は母の代作ではありません。）

61　いにしへの奈良の都の八重桜今日九重に匂ひぬるかな

作者　**伊勢大輔**［生没年不詳］一〇六〇年以降に七十数歳で亡くなったとされる。中宮彰子に仕え、紫式部や和泉式部らと親交があった。平安中期を代表する歌人の一人。多くの歌合に出詠し、約半世紀にわたって活躍した。

歌意　遠い昔の奈良の都の（美しく咲き誇っていた）八重桜が、今日は京の都の宮中のこの辺りで、本当に美しく咲きにおっていることだなあ。

62　夜をこめて鳥の空音ははかるともよに逢坂の関は許さじ

作者　**清少納言**［生没年不詳］清原深養父のひ孫、元輔の娘。一条天皇の中宮定子に仕えた。当代随一の知識人であった藤原公任・俊賢・行成らとも交流があった。鋭い観察眼と機知で、三大随筆（『枕草子』『方丈記』『徒然草』）の一つである『枕草子』を著した。

歌意　夜であることを隠して、鶏の鳴き声をまねてだまそうとしても、（中国の孟嘗君の故事で有名な函谷関ならばともかく）私たちが会うのを止める逢坂の関は（だまされることなく）決して（二人が会うのを）許さないでしょう。

63　今はただ思ひ絶えなむとばかりを人づてならでいふよしもがな

作者　**左京大夫道雅**［九九三？―一〇五四］藤原伊周の子で、道隆の孫。順調に出世したが、中関白家が衰えたこと、また、前斎宮当子内親王との間に恋愛事件を起こしたために上皇の怒りにふれ、冷遇されて不遇な晩年を送った。

歌意　（会うことも許されなくなって）今はただもう、あなたのことを諦めてしまおうということだけを、人づてではなくて、直接あなたに伝える方法があったらなあ。（せめてもう一度あなたにお会いしたいと思うのです。）

64　朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木

作者　**権中納言定頼**［九九五―一〇四五］藤原定頼のこと。藤原公任の子。父に似た有能な貴族で、和歌、書、誦経に優れていた。小式部内侍や大弐三位、相模などの宮廷女房たちと親交があった。特に小式部内侍とのやりとりは、『百人一首』の六十番の歌でも有名である。

歌意　ほのぼのと夜が明ける頃、宇治川に立ちこめていた川霧が、途切れ途切れに晴れて、その絶え間から一面に現れてくる、川のあちらこちらの浅瀬の網代木よ。

65　恨みわびほさぬ袖だにあるものを恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ

作者　**相模**［生没年不詳］祐子内親王の女房として仕えた。新鮮な歌風で、数々の歌合にも出詠した。赤染衛門などと並び称される当代の代表的な歌人である。

歌意　（相手のつれなさを）恨み悲しんで、涙で乾かす暇もない袖でさえ朽ちないで残っているのに、この恋の浮き名のために、朽ちてしまうにちがいない私の評判が本当に惜しいことです。

66　もろともにあはれと思へ山桜花より外に知る人もなし

作者　**前大僧正行尊**［一〇五五―一一三五］俗名は不詳。十二歳で出家し、五年後に諸国行脚の旅に出た。初めは山伏の修行をし、修験道に優れ、白河・鳥羽・崇徳の三天皇に信頼されて護持僧となった。音楽や書道などでも才能を発揮した。

歌意　あなたをしみじみと懐かしく思う私と一緒に、あなたも私を懐かしく思ってください、山桜よ。（今となっては）桜の花のあなたよりほかに、私（の気持ち）をわかってくれる人などいないのですから。

67　春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ

作者　**周防内侍**［生没年不詳］一一一一年までに六十から八十歳で亡くなったとされる。本名は、平仲子。後冷泉天皇に出仕し、後三条・白河・堀河天皇にも仕えた。平安後期を代表する歌人で、複数の歌合に出詠している。

歌意　（あなたはご自分の腕を枕にとおっしゃいますが）はかなくも短い春の夜の夢のようにはかない契りのために、腕をお借りしたかいもなく立つであろう浮き名が本当に残念なのです。

68　心にもあらで憂き世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな

作者　**三条院**［九七六―一〇一七］第六十七代天皇。在位中に皇居が二度炎上し、眼病に悩まされたうえに、左大臣道長の圧迫を受け、五年間で退位した。その後出家したが、すぐに崩御した。

歌意　不本意にも、もしつらいこの世に生きながらえるならば、（そのときは）きっと恋しく思うにちがいない、この美しい夜中の月であることよ。

69

嵐吹く三室の山のもみぢ葉は龍田の川の錦なりけり

作者 **能因法師**［九八八―？］三十歳頃に出家して融因と号し、後に能因と改号した。漂泊の行脚とともに歌作をし、九州以外のほとんどの地に赴いた。歌作に対する気持ちが強く、当時の歌壇の第一人者で、指導的な立場にもあった。

歌意 激しい山風が吹き下ろす三室山の（散り乱れる）紅葉は、龍田川の（水面に流れ入って、川面一面のすばらしい）錦織のようであることだなあ。

70

さびしさに宿を立ち出でて眺むればいづこも同じ秋の夕暮れ

作者 **良暹法師**［生没年不詳］十一世紀前半の歌人で、当時、一目おかれていたようである。『袋草子』『古今著聞集』などに逸話が残されている。

歌意 寂しさに耐えかねて、庵を出てしみじみとものの思いにふけりながら辺りを眺めていると、どこもかしこも同じように寂しい秋の夕暮れであることよ。

71

夕されば門田の稲葉おとづれて芦のまろやに秋風ぞ吹く

作者 **大納言経信**［一〇一六―一〇九七］姓は源。和歌・管弦・文学・有職などに才能を発揮し、藤原公任と同様に「三船（舟）の才」と称された。特に和歌は叙景歌に優れ、風格があり、平安後期の歌壇を代表するとともに、後世への影響も大きかった。歌合にも参加し、判者としての力量も高く評価された。

歌意 夕方になると必ず、家の前の田の稲の葉に（さやさやと葉の）音をたてて訪れて、芦で葺いた仮小屋に秋風が吹いてくるよ。

72

音に聞くたかしの浜のあだ波はかけじや袖の濡れもこそすれ

作者 **祐子内親王家紀伊**［生没年不詳］祐子内親王に仕えた。母も兄も歌人であった影響を受け、その才能を発揮し、多くの歌合に出詠するなど、一〇五〇年以降五十三年間の詠作が残っている。

歌意 名高い高師の浜のむなしく寄せては返す波は、（決して）袖にかけますまい、袖がぬれたら困りますから。（そのように）浮気で有名なあなたには、思いをかけますまい。（うっかり思いをかけて捨てられて）涙で袖がぬれたら大変ですから。

73　高砂の尾の上の桜咲きにけり外山の霞たたずもあらなむ

作者　**前中納言匡房**［一〇四一―一一一一］大江匡房のこと。学問の家柄に生まれ、四歳で書を読み、八歳で『史記』や『漢書』に通じ、十一歳で詩を作った神童といわれている。歌人としてよりも漢学者として著名で、『江家次第』『江談抄』などの著書がある。

歌意　高い山の峰の山桜が咲いたことだなあ。（美しい山桜が隠れないように）人里近い山の霞よ、どうか立ちこめないでほしいものだ。

74　うかりける人を初瀬の山おろしよはげしかれとは祈らぬものを

作者　**源俊頼朝臣**［一〇五五―一一二九］当代を代表する歌人で、歌合に出詠したり判者になったりした。革新的で進歩的、新鮮な歌風であった。白河院からの院宣で、『金葉集』を編纂した。和歌を志す者に必要な知識などを説いた歌論書『俊頼髄脳』を著した。

歌意　私につれなかったあの人を、初瀬の山から吹き下ろす風よ、（あの人の心が私になびくようにと初瀬観音に祈りはしたものの）つらさがいっそう激しくなれとは祈らなかったのになあ。

75　契りおきしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり

作者　**藤原基俊**［一〇六〇―一一四二］藤原道長のひ孫で、右大臣俊家の子。和漢の才能に恵まれ、歌学に造詣が深く、『万葉集』に次点（訓点の一つ）を施した。源俊頼とともに当代を代表する歌人であるが、俊頼が進歩的であったのに対して保守的で、旧風の代表者である。数多くの歌合の判者を務めた。

歌意　（私の子を維摩会の講師にさせようと）お約束くださった、させも草の露のようにありがたいあなたの言葉を命のように大切にしてきましたが、ああ、今年の秋も（むなしく）過ぎ去ってしまうようです。

76　わたの原漕ぎ出でて見れば久方の雲居にまがふ沖つ白波

作者　**法性寺入道前関白太政大臣**［一〇九七―一一六四］藤原忠通のこと。二十七年間に太政大臣を二回、関白を三回、摂政も三回務めた。温厚な人物で、和歌・漢詩・書に優れ、特に書は後世に影響を与えた。六十六歳で出家し、天台・真言の教理に深く通じていた。

歌意　海原に船をこぎ出して辺りを見渡すと、（遠くの方では）白い雲と区別がつかないような沖の白波であることよ。

77　瀬を早み岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ

作者　**崇徳院**［一一一九―一一六四］第七十五代天皇。五歳で即位し、十九歳のときに父鳥羽上皇の意向で譲位した。その後、わが子の即位をめぐる対立から保元の乱が起こり、敗れた崇徳院は讃岐へ流された。和歌には特に熱心で、百首歌を何度も詠進させた。『久安百首』が有名。また、『金葉集』『詞花集』を詠進させた。自身は古典的で理知的な歌風であった。

歌意　川の浅瀬の流れが速いので、岩にせき止められる急流が二つに分かれてもまた下流では合流するように、たとえあの人との間を隔てられても、将来必ず結ばれようと思うのです。

78　淡路島通ふ千鳥の鳴く声に幾夜寝覚めぬ須磨の関守

作者　**源兼昌**［生没年不詳］一一〇〇年前後の人。堀河院歌壇に属し、複数の歌合に参加して活躍したが、歌人としての名声はそれほどでもなかったようである。

歌意　淡路島から通ってくる千鳥がもの悲しく鳴く声のために、幾夜目を覚ましたことだろうか、須磨の関守は。

79　秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ

作者　**左京大夫顕輔**［一〇九〇―一一五五］藤原顕輔のこと。歌と歌学の家柄で、父からその才能を認められ、六条歌学を受け継いだ。歌合に出詠し、判者を務め、自身も主催した。旧風で、格調のある歌風であった。崇徳院の院宣を受け、『詞花集』を編集した。

歌意　秋風にたなびいている雲の切れ間から漏れ出てくる月の光の、なんと清らかで澄んでいることよ。

80　長からむ心も知らず黒髪の乱れてけさは物をこそ思へ

作者　**待賢門院堀河**［生没年不詳］十二世紀前半の女性歌人。前斎院令子内親王に仕えたのち、待賢門院璋子に仕えた。当代を代表する歌人で、西行と親交があったようである。

歌意　末長く変わることなく私を愛してくださるとはどうも私にはわかりません。黒髪が乱れるように、私の心は乱れて、（お会いして別れた）今朝はもの思いをしていることですよ。

81　ほととぎす鳴きつる方を眺むればただ有り明けの月ぞ残れる

作者　**後徳大寺左大臣**［一一三九―一一九一］藤原実定のこと。詩歌管弦に才能を発揮し、蔵書家としても知られていた。『平家物語』や『古今著聞集』、『徒然草』などに逸話がみられる。

歌意　ほととぎすの鳴いた方角を見渡してみたところ、（ほととぎすの姿はなく）ただ明け方の月だけが空に残っていたことよ。

82　思ひわびさても命はあるものを憂きにたへぬは涙なりけり

作者　**道因法師**［生没年不詳］一〇九〇年に生まれ、九十歳くらいで没したとされる。俗名は藤原敦頼。崇徳院に仕えたのち、出家した。歌合に出詠し、参加も数多くしている。出家後はますます歌道に熱心になっていった。

歌意　（つれない人のことを）思い悩んで、そんなふうにしていても、死にもしないで命はあるのに、つらさに耐えきれない（でこぼれ落ちる）のは涙であるのだなあ。

83　世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる

作者　**皇太后宮大夫俊成**［一一一四―一二〇四］藤原俊成のこと。藤原定家の父。後白河法皇の院宣により『千載集』を撰進した。また、式子内親王の命で『古来風体抄』を著した。伝統的な歌風と革新的な歌風を受け継ぎ、「幽玄」の歌境を作りあげていった。当時の歌壇の指導者でもあり、多くの歌合の判者を務めた。

歌意　世の中よ、（この世にはつらいことがあっても）逃れる道はないのだなあ。深く思いつめて分け入った山の奥にもやはりつらいことがあるのか、鹿が悲しげに鳴いているようであるよ。

84　ながらへばまたこのごろや忍ばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき

作者　**藤原清輔朝臣**［一一〇四―一一七七］藤原顕輔の子。穏健で実証的な学風に特色があり、歌人としてよりも歌学者としての才能が勝っていた。『奥義抄』『和歌一字抄』など数多くの歌論書を著した。

歌意　（この世の中に）もし生きながらえるならば、やはりまた（つらいことの多い）この頃が懐かしく思い出されるのであろうか。（かつては）つらいと思った世が今となっては恋しく思われるのだから。

85　夜もすがら物思ふころは明けやらで閨のひまさへつれなかりけり

作者　**俊恵法師**［一一一三―？］源俊頼の子。自宅を歌林苑と称し、身分にかかわりなく歌人を集め、数多くの歌合を催した。藤原俊成や藤原清輔とも交流があった。弟子に鴨長明がおり、長明の『無名抄』には俊恵に関する歌話が多く見られる。

歌意　（無情なあの人を恋い慕って）ひと晩中思い嘆いている頃は、（早く明けてくれればよいのに）夜はなかなか明けないで、（あの人だけではなくそのうえ朝日を入れない）寝室の隙間までも薄情なことだ。

86　嘆けとて月やは物を思はするかこち顔なるわが涙かな

作者　**西行法師**［一一一八―一一九〇］俗名は佐藤義清。鳥羽上皇に仕えて北面の武士となったが、二十三歳で出家した。厳しい求道精神と自然に対する愛情を反映した歌風である。藤原俊成と並んで平安末期を代表する歌人で、松尾芭蕉などにも大きな影響を与えた。各地を行脚し、鎌倉で源頼朝とも対談している。

歌意　嘆き悲しめといって、月が私にもの思いをさせるのであろうか、いや、そうではない。（あの人がそうさせるのだ。）それなのに、月のせいであるかのように恨みがましい様子でこぼれ落ちる私の涙であることよ。

87　村雨の露もまだ干ぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕暮れ

作者　**寂蓮法師**［？―一二〇二］俗名は藤原定長。藤原俊成の養子となったが、定家が生まれたので離籍し、出家した。仏道修行に励みつつ、多くの歌合に出詠した。『新古今集』の撰者の一人に選ばれたが、撰歌の途中で没した。

歌意　村雨の滴もまだ乾かない真木の葉のあたりに霧が立ち上っているもの寂しい秋の夕暮れであることよ。

88　難波江の芦のかりねのひとよゆゑみをつくしてや恋ひわたるべき

作者　**皇嘉門院別当**［生没年不詳］詳細な伝記は不明だが、崇徳院の皇后聖子に女房として仕えた。複数の歌合に参加した。

歌意　難波の入り江の芦の刈り根の一節のように、それほどに短い旅の仮寝のひと夜をあなたと過ごすために、澪標ではないが、この身をあなたにささげて恋い続けなければならないのでしょうか。

89　玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

作者　**式子内親王**［？―一二〇一］後白河院の第三皇女。藤原俊成に歌を習い、本歌取り・三句切れ・体言止めなどの技法を駆使し、幽玄・有心の歌境を追究した。当代随一の女性歌人で、孤独感や哀感のにじみ出る歌が多い。藤原定家と恋愛関係にあったとする説がある。

歌意　私の命よ、もし絶えてしまうのなら、いっそのこと絶えてしまえ。生きながらえていると（恋心がいっそう強くなって）耐え忍ぶ心が弱って、（秘めていた恋心が人目について）困ってしまうから。

90　見せばやな雄島の蜑の袖だにも濡れにぞ濡れし色は変はらず

作者　**殷富門院大輔**［生没年不詳］後白河天皇の皇女殷富門院亮子に仕えた。歌合にも参加し、小侍従とともに当代一流の歌人として知られる。西行や寂蓮などと交流があり、藤原定家とは特に親しかったようである。

歌意　（悲しみの涙のために色が変わった私の袖を）お見せしたいものですよ。（あの歌に詠まれた）松島の雄島の漁夫の袖でさえも、ひどくぬれていたにもかかわらず色は変わらないのに。

91　きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む

作者　**後京極摂政前太政大臣**［一一六九―一二〇六］藤原良経のこと。詩歌・管弦に優れ、後鳥羽院歌壇の中心として活躍した。幽玄・有心の新古今調の確立に大きく寄与し、『新古今集』の撰集に力を尽くした。能書家としても知られる。

歌意　こおろぎが鳴いているよ。この霜の降りた夜の寒々としたむしろの上に、着物を着たまま片袖を敷いて私は（寂しく）一人で寝るのだろうか。

92　わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾く間もなし

作者　**二条院讃岐**［一一四一頃―一二一七頃］二条天皇の女房として仕え、後鳥羽院の中宮宜秋門院に仕えたのち、出家した。叙情豊かな歌風で、式子内親王と並ぶ鎌倉初期の代表的な女性歌人であった。複数の歌合に参加している。

歌意　私の着物の袖は、潮が引いたときでも（海中に隠れて）見えない沖の石のように、あの人は知らないだろうけれども、（悲しみの涙で）乾く間もありません。

93　世の中は常にもがもな渚漕ぐ海人の小舟の綱手かなしも

作者　**鎌倉右大臣**［一一九二―一二一九］　源実朝のこと。平家を滅ぼし鎌倉幕府をひらいた源頼朝の次男で三代将軍。早くから京都文化に憧れ、和歌や蹴鞠を愛した。藤原定家の指導を受け、『万葉集』や『近代秀歌』を贈られ、万葉調の「ますらをぶり」の歌風に傾いていった。

歌意　世の中は常に変わらないであってほしいものだなあ。波打ち際をこぐ漁師が、小舟の引き綱を引いていく様子は心ひかれることよ。

94　み吉野の山の秋風さ夜更けてふるさと寒く衣打つなり

作者　**参議雅経**［一一七〇―一二二一］後鳥羽・土御門・順徳の三代に仕えた。後鳥羽院に召されて『新古今集』の編纂に加わった。新古今調の典型的な美的意識を確立した歌人の一人とされる。鎌倉幕府二代将軍源頼家の蹴鞠の師でもあった。

歌意　吉野の山の秋風が吹き下ろし、夜も更けて、旧都のあったこの吉野の里では、寒々と衣を打つ音がするようだ。

95　おほけなくうき世の民に覆ふかな我がたつ杣に墨染の袖

作者　**前大僧正慈円**［一一五五―一二二五］藤原忠道の子。十歳で父を亡くし、十四歳で出家した。技巧的な歌風で、速吟を得意とした。藤原良経・定家とともに新風を開き、西行と並ぶ新古今時代の代表的な歌人であった。宗教家としては、法然、親鸞らを保護。なお、法然のもとには熊谷直実が弟子入りしている。

歌意　身のほどもわきまえず、この世の中の人々に、仏の加護を祈念して覆いかけることであるよ。木を切り出す杣山といわれる比叡山に住み始めた私の墨染めの衣の袖を。

96　花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものは我が身なりけり

作者　**入道前太政大臣**［一一七一―一二四四］藤原公経のこと。藤原定家の義弟にあたる。承久の乱では鎌倉幕府側の姿勢をとって朝廷方の敗北の原因を作った。その後は栄華を極め、従一位太政大臣となった。病気になると出家し、北山山荘（＝西園寺、後の鹿苑寺）に隠棲した。

歌意　桜の花を誘って散らす嵐の吹く庭の花吹雪ではなくて、降ってゆくものは花吹雪というのではなくて、旧りゆくのは自分の身であったのだなあ。

97　来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ

作者　**権中納言定家**［一一六二―一二四一］藤原定家のこと。藤原俊成の次男。『新古今集』の撰者となり、『新勅撰集』にも関わった。俊成の歌風を踏襲しつつ、有心・妖艶の独特な歌境を作っていった。中世を代表する歌人。歌論に『近代秀歌』『毎月抄』などがある。また、『源氏物語』『伊勢物語』などの書写校合により後世の古典研究に大きく寄与した。

歌意　（いくら待っても）来ない人を待つ私は、松帆の浦の夕なぎの浜辺で焼いている藻塩が焼け焦げるように、身も焦がれるほどに、恋い慕い続けていますよ。

98　風そよぐならの小川の夕暮れはみそぎぞ夏のしるしなりける

作者　**従二位家隆**［一一五八―一二三七］藤原家隆のこと。藤原俊成に歌を学び、数々の歌合で活躍した。『新古今集』の撰者の一人。叙景歌に優れ、藤原定家と並び称される、中世の代表的な歌人である。古典の書写校合も多く行った。後鳥羽院からの信任が厚く、院が隠岐に配流されてからも書状の交換を続けた。

歌意　風がそよそよと楢の葉に吹きそよぐ、ならの小川の夕暮れは、（すっかり秋の気配ではあるが、この小川で行われている）みそぎだけが、まだ夏であることの印であるなあ。

99　人も惜し人も恨めしあぢきなく世を思ふ故に物思ふ身は

作者　**後鳥羽院**［一一八〇―一二三九］第八十二代天皇。四歳で即位して十九歳で譲位し、その後は院政を執った。一二二一年に承久の乱を起こしたが失敗し、隠岐に流された。書道・管弦・蹴鞠などに才能を発揮した。歌合を催し、藤原定家らに『新古今集』を撰進させ、自身も歌をよく詠んだ。

歌意　人がいとおしくも、また人が恨めしくも思われる。意に添わずつまらないものとこの世を思うために、あれやこれやと思い悩むわが身には。

100　ももしきや古き軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり

作者　**順徳院**［一一九七―一二四二］第八十四代天皇。十二歳で即位したが、後鳥羽院とともに承久の乱を起こし、敗れて佐渡に流された。聡明で資質もあり、藤原定家に和歌を学んで平明優雅な歌風を確立し、しばしば歌合を催した。管弦にも優れていた。

歌意　宮中の建物の古く荒れた軒端に生えている忍ぶ草を見るにつけても、（朝廷の力の衰えが身にしみて感じられ）懐かしんでもやはり懐かしみきれない昔（の栄えていた御代）であることよ。